

中田かわら版 7 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

■この人に会いたい<74>

あの惨劇を繰り返さないために

鈴木 智子さん (92) 宮の台町内会

日本が降伏したあの日が近づいてきました、皆さん夫々の思いをお持ちでしょうけれど今回は東京大空襲の体験者に話を伺いました。その方は中田北にお住まいの鈴木智子（としこ）さんです。この時中学 1 年生もなく 2 年生に成ろうという昭和 20 年 3 月 10 日夜突然空襲警報がけたたましく響きとっさに防空頭巾をかぶりしました。（この頃すでに日本列島の制空力は無く爆撃機のなすがままだった模様です）外に出たら暗い夜空にパッパッと無数の花火がはじけていました。母が焼夷弾だから防空壕では危ないととっさに判断したらしく正に着の身着のまま母の手を握りしめ一目散に走り出しました。焼夷弾が空中でばらけて落下し、建物に貼り付きますとそれは瞬時に燃え上がり行く手を遮ります。辻々から飛びだしてくるおびただしい数の人たちにぶつかり小突かれ跳ね飛ばされながらようやく隅田川の川辺に着きました。ここには熱さに耐えかねて飛び込む人が沢山居て、自分も防空頭巾が焦げて手足が熱くて早く飛び込みたかったけれど、母の手がそれを許さず、人の流れに押される様に橋を渡りきりました。そこは火の手が無くようやくほっとしました。しかし惨事が起きました。たった今自分が渡



昭和 30 年代

ったばかりの木造の橋が焼け落ちたのです。橋ごと川に落ちた人やこれから渡ろうとしていた人たちは後から後から押されて次々に落ちるその川面を熱風が走って、何百人とも知れない人がゆっくりと流されていく光景は思い出したくなくてこの数十年話したことはありませんでした。呆然とした中で「自分達は助かった」と我に返ったとき母の手に裁ちばさみが一丁しっかり握られていました。鈴木さん一家は東京都深川区古石場に住いして、母は家で縫い物の仕事をし、父が東京都の土木課勤務で東京湾の護岸工事に携わっていたので、「何かの時には現場事務所に集合」が合い言葉でした。だから一目散にそこへ向かったのですが反対方向に逃げた方々はどうなったかしら。

筆者の持つ情報（毎日新聞発行の冊子 1 億人の昭和史④ 1975 年 9 月）によると空爆が本格化した昭和 19 年 11 月 1 日から終戦までの 9 か月間に飛来した B29 は延べ 1 万 7 千 500 機、投下した爆弾 16 万トン、被災者 920 万人、全焼家屋 221 万戸と書かれている。こうしている今も世界の何処かで戦争が絶えない。領土を増やそうとする国がある。国家存続のため戦う国がある。夫々が夫々に大義を持っている。しかしこれだけは言える『戦争はしてはならない。』

“日本”はあの敗戦を経験して以来 79 年間、他国と戦争をしていません。私達は再び惨禍に巻き込まれないために体験を語り継いで行かなければ、との思いでインタビューさせていただきました。（第 2 の被爆国を出さぬ為にも）

河内満明

「かわら版」に感謝状 松本 正

5月11日に中田町会館で中田地区経営委員会の総会が開催されました。開会して間もなく会次第には記載されていない感謝状授与式が行われました。会場が急な展開にシンとした時、井上昌司委員長に呼ばれたのは「かわら版編集委員長 宮田貞夫さん」です。「かわら版」発行200か月、初回から1回も休刊せず発行し続けた功績を讃える感謝状であり、宮田さん自身知らされずに会場へ足を運んでいたのです。後日、宮田さんは賞状を「かわら版」編集委員の皆に見せ、感激、感謝の言葉を述べました。以下にその内容を記します。

■感謝状を頂いて 宮田貞夫

今回の感謝状は率直に喜んでいただいた。事前に通知も無く井上委員長から突然、ハプニングな演出で感激的でした。その時思ったのは、確かに自分は一番永く「中田かわら版」に創刊号から携わってきたが、この種の仕事は自分一人の力ではできない多様性のある作業。多くの協力者が編集、発行というプロセスを超えて作り上げていくものである。その意味で一番感謝したいのが踊場ケアプラザの所長・生田さんをはじめ、歴代の葛西さん、そして現在の嶋さんらの全面的協力があって継続ができたということ強く伝えたい。この協力なくして「かわら版」の発行は不可能であった。また、そこに結集してくれた多くの優秀な人材がいつも傍にいて、ともに楽しく仕事が出来たことにも感謝している。



17年という歳月は決して長いとは思わないが、ただ一度も欠号なくやってきたのは誇りにしていると思う。これも元気で長生き（今月で90歳）してきたおかげと思っている。

感謝状の授与は「かわら版」活動が一般に認められたということ。この意味は大きい。次は個人的な感謝状ではなく「かわら版」が地域の文化の向上に寄与したということで「かわら版」と編集者を合わせた団体の功績を表彰する意味の「表彰状」が与えられたら最大の励みになるだろう。私の心からの希望である。

最後に一言、私の受賞の機会を作ってくれたのは、経営委員会の井上委員長の人柄を含めた存在が大きいと思う。この幸運にも併せて感謝申し上げたい。

編集後記

これだけは言える「戦争はしてはならない」。
「この人」<74>で鈴木智子さん（92）を取材した河内満明さんの感慨が心を打つ。悲惨な戦争体験を長く口を閉ざしてきた鈴木さんが、今回赤裸々に語ってくれた心情と勇気に感謝したい。高齢化で戦争の語部が少なくなり風化が心配の中、今回改めて平和の尊さを教えてくれた記事だった。（宮田貞夫）

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本正

編集委員；山木重樹、小島敏子、田中進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋 宏之